「共通テスト」を受験する人対象の対策講座です。第１・２回試行調査とオリジナル予想問題を実施します。
「共通テスト」は、それまでのセンター試験よりも「知識・技能や思考力、判断力を問う」とされ、複数の資料を読み比べたり、生徒同士や教師と生徒たちとの会話文を素材としての問題が出題されたりします。

それらの問題も本講座で扱いますので、しっかり取り組んでいきましょう。
とは言え、古文や漢文を正しく読解するために必要な学力は、どの大学だろうが、過去のセンター試験だろうが、共通テストでも変わらず同じです。
古文であれば、「重要単語」と「古文文法」などの読解のための土台や、「基本的な読解ルール」や「古文常識」を理解できていなければ読めません。漢文であれば、「語順」や「置き字」などの土台と「重要句法」、重要単語や頻出の「読み」などをおさえる必要があります。
本講座では、これらは既に理解できているものとして授業を行いますので、それらが未学習の場合は、先に『古文文法編』（学年問わず・ベーシック講座でも可）や『スタンダード古文読解』、『漢文』（学年問わず・ベーシック講座でも可）などの講座を受講してから、本講座を受講してください。

それでは、共通テストで古典が得点源になるように一緒に頑張っていきましょう！

岡本　梨奈

予復習・授業の受け方について

各講の動画を見る前に、必ず該当の講の予習を（辞書など使わず自力で）してください。
制限時間は各大問二十分を目安に実施をしてください。
ただし、自身の戦略が既に立っている人は、自分の時間配分を目安に実施しましょう。
また、万一、目標時間内に解けなかった場合は、そのまま最後まで納得いくまで解ききってください。そして、現状何分かかったのかを確認すること。どれくらいオーバーしてしまったのかを把握して、目標時間内に解ききるためにはあと何分縮めなければいけないのか意識してください。
予習が終わったら、なるべく時間をあけずに該当講座の動画を見てください。
講義を見終えたら、復習を必ずしましょう。間違えた問題があれば、何が原因で間違えたのかを各自で分析して、そこを潰していきましょう。ちなみに、目標時間内に解けない人の原因の多くは、「単語」の意味や「文法」が出てくるのに時間がかかりすぎなことが挙げられます。「理解はできているけれど、出てくるのが遅い」という状態だと、やはり時間がかかってしまいます。秒速で出てくるくらいに何度も反復復習をしましょう。
それらができているのに時間がかかる場合は、選択肢を横に読み比べるスピードや、要領の良い解き方ができているかどうかなど、様々な原因が考えられますので、どこで手間取ってしまったのかをご自身で分析してください。
あと、復習の際に再度選択肢を見て、間違い選択肢の「どこが間違いなのか」がわかるかどうか、どういうひっかけにしているかなども意識して分析してみてもよいでしょう。
本講座をすべて受講した後は、共通テスト用の演習問題をどんどん実施してください。
従前のセンター過去問も良い演習になりますので、本試も追試も手に入る分は是非チャレンジしましょう。

目次

古文

第１講 ２０１７年度 試行調査 第４問（古文）……p1
第２講 ２０１８年度 試行調査 第４問（古文）……p13
第３講 演習問題（古文）……p23

漢文

第４講 ２０１７年度 試行調査 第５問（漢文）……p33
第５講 ２０１８年度 試行調査 第５問（漢文）……p43
第６講 演習問題（漢文）……p53

第１講　２０１７年度　試行調査　第４問（古文）

第４問

『源氏物語』は書き写す人の考え方によって本文に違いが生じ、その結果、本文によって表現が異なっている。次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、ともに『源氏物語』（桐（きり）壺（つぼ）の巻）の一節で、最愛の后（きさき）である桐壺の更衣（こうい）を失った帝（みかど）のもとに、更衣の母から故人の形見の品々が届けられた場面である。【文章Ⅰ】は藤原定家が整えた本文に基づき、【文章Ⅱ】は源光行（みつゆき）・親行（ちかゆき）親子が整えた本文に基づいている。また、【文章Ⅲ】は源親行によって書かれた『原中最秘抄（げんちゅうさいひしょう）』の一節で、【文章Ⅱ】のように本文を整えたときの逸話を記している。【文章Ⅰ】～【文章Ⅲ】を読んで、後の問い（問１～６）に答えよ。

【文章Ⅰ】

かの贈りもの御覧ぜさす。亡き人の住みか尋ねいでたりけむ、(ア)しるしの釵（かんざし）ならましかば、と思（おも）ほすも、いとかひなし。

(イ)尋ねゆく幻もがなつてにても魂（たま）のありかをそこと知るべく

絵(注2)に描ける楊貴妃（やうきひ）の容貌（かたち）は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。太液（たいえき）(注3)の芙蓉（ふよう）、未央（びあう）の柳も、げに通ひたりし容貌を、唐（から）めいたるよそひはうるはし

メモ欄

うこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思(おぼ)し出(い)づるに、花鳥(はなとり)の色にも音(ね)にも、よそふべきかたぞなき。

【文章Ⅱ】

かの贈りもの御覧ぜさす。亡き人の住みか尋ねいでたりけむ、しるしの釵ならましかば、と思すも、いとかなし。

　尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。太液の芙蓉も、げに通ひたりし容貌・色あひ、唐めいたりけむよそひはうるはしう、けうらにこそはありけめ、なつかしうらうたげなりしありさまは、女郎花(をみなえし)の風になびきたるよりもなよび、撫子(なでしこ)の露に濡(ぬ)れたるよりもらうたく、なつかしかりし容貌・気配を思し出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべきかたぞなき。

メモ欄

（注）１ 亡き人の住みか尋ねいでたりけむ、しるしの釵 ―― 唐の玄宗皇帝と楊貴妃の愛の悲劇を描いた漢詩「長恨歌」による表現。玄宗皇帝は、最愛の后であった楊貴妃の死後、彼女の魂のありかを求めるように道士（幻術士）に命じ、道士は楊貴妃に会った証拠に金の釵を持ち帰った。

２ 絵 ―― 更衣の死後、帝が明けても暮れても見ていた「長恨歌」の絵のこと。

３ 太液の芙蓉、未央の柳 ―― 太液という池に咲いている蓮（はす）の花と、未央という宮殿に植えられている柳のことで、いずれも美人の形容として用いられている（「長恨歌」）。

【文章Ⅲ】

亡父光行、昔、五条三品（注1）にこの物語の不審の条々を尋ね申し侍り（はべ）し中に、当巻に、「絵に描ける楊貴妃の形は、いみじき絵師と言へども、筆限りあれば、匂ひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も」と書きて、「未央の柳」といふ一句を見せ消ち（注2）（け）にせり。これによりて親行を使ひとして、「楊貴妃をば芙蓉と柳とにたとへ、更衣をば女郎花と撫子にたとふ、みな二句づつにてよく聞こえ侍るを、御本（注3）、未央の柳を消たれたるは、いかなる子細の侍るやらむ」と申したりしかば、

「我は(ウ)<u>いかでか自由の事をばしるべき</u>。行成卿（注4）（きやう）の自筆の本に、この一句を見せ消

メモ欄

ちにし給ひき。紫式部同時の人に侍れば、申し合はする様こそ侍らめ、とてこれも墨を付けては侍れども、いぶかしさにあまたたび見しほどに、若菜(注5)の巻にて心をえて、おもしろくみなし侍るなり」

と申されけるを、親行、このよしを語るに、

「若菜の巻には、いづくに同類侍るとか申されし」

と言ふに、

「それまでは尋ね申さず」

と答へ侍りしを、さまざま恥(は)ぢしめ勘当し侍りしほどに、親行こもり居て、若菜の巻を数遍ひらきみるに、その意をえたり。六条院(注6)の女試楽(しがく)、女三の宮、人よりちいさくうつくしげにて、ただ御衣のみある心地す、にほひやかなるかたはをくれて、いとあてやかになまめかしくて、二月の中の十日ばかりの青柳のしだりはじめたらむ心地して、とあり。柳を人の顔にたとへたる事あまたになるによりて、(エ)<u>見せ消ちにせられ侍りしにこそ。</u>三品の和才すぐれたる中にこの物語の奥義をさへきはめられ侍りける、

メモ欄

ありがたき事なり。しかあるを、京極中納言入道（注7）の家の本に「未央の柳」と書かれたる事も侍るにや。又俊成卿（注8）の女（むすめ）に尋ね申し侍りしかば、

「この事は伝々の書写のあやまりに書き入るるにや、あまりに対句めかしくにくいけしたる方侍るにや」

と云々（しかじか）。よりて愚本にこれを用いず。

（注）
1　五条三品――藤原俊成。平安時代末期の歌人で古典学者。
2　見せ消ち――写本などで文字を訂正する際、もとの文字が読めるように、傍点を付けたり、その字の上に線を引くなどすること。
3　御本――藤原俊成が所持する『源氏物語』の写本。
4　行成卿――藤原行成。平安時代中期の公卿で文人。書道にすぐれ古典の書写をよくした。
5　若菜の巻――『源氏物語』の巻名。
6　六条院の女試楽――光源氏が邸宅六条院で開催した女性たちによる演奏会。
7　京極中納言入道――藤原定家。藤原俊成の息子で歌人・古典学者。
8　俊成卿の女――藤原俊成の養女で歌人。

メモ欄

問１　傍線部(ア)「しるしの釵ならましかば」とあるが、直後に補うことのできる表現として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 1 。

① いかにうれしからまし
② いかにめやすからまし
③ いかにくやしからまし
④ いかにをかしからまし
⑤ いかにあぢきなからまし

問２　傍線部(イ)「尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」の歌の説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［２］。

①　縁語・掛詞は用いられていない。
②　倒置法が用いられている。
③　「もがな」は願望を表している。
④　幻術士になって更衣に会いに行きたいと詠んだ歌である。
⑤　「長恨歌」の玄宗皇帝を想起して詠んだ歌である。

問３ 傍線部(ウ)「いかでか自由の事をばしるべき」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **3** 。

① 勝手なことなどするわけがない。
② 質問されてもわからない。
③ なんとかして好きなようにしたい。
④ あなたの意見が聞きたい。
⑤ 自分の意見を言うことはできない。

問４　傍線部(エ)「見せ消ちにせられ侍りしにこそ」についての説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［４］。

① 紫式部を主語とする文である。
② 行成への敬意が示されている。
③ 親行の不満が文末の省略にこめられている。
④ 光行を読み手として意識している。
⑤ 俊成に対する敬語が用いられている。

問５　**【文章Ⅱ】**の二重傍線部「唐めいたりけむ～思し出づるに」では、楊貴妃と更衣のことが、**【文章Ⅰ】**よりも詳しく描かれている。この部分の表現とその効果についての説明として、**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［５］。

① 「唐めいたりけむ」の「けむ」は、「長恨歌」中の人物であった楊貴妃と、更衣との対比を明確にしている。

② 「けうらにこそはありけめ」という表現は、中国的な美人であった楊貴妃のイメージを鮮明にしている。

③ 「女郎花」が風になびいているという表現は、更衣が幸薄く薄命な女性であったことを暗示している。

④ 「撫子」が露に濡れているという表現は、若くして亡くなってしまった更衣の可憐（かれん）さを引き立てている。

⑤ 「○○よりも△△」という表現の繰り返しは、自然物になぞらえきれない更衣の魅力を強調している。

問６　【文章Ⅲ】の内容についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［６］。

① 親行は、女郎花と撫子が秋の景物であるのに対して、柳は春の景物であり、桐壺の巻の場面である秋の季節に使う表現としてはふさわしくないと判断した。そこで、【文章Ⅱ】では「未央の柳」を削除した。

② 俊成の女は、「未央の柳」は紫式部の表現意図を無視した後代の書き込みであると主張した。そして、俊成から譲られた行成自筆本の該当部分を墨で塗りつぶし、それを親行に見せた。

③ 光行は、俊成所持の『源氏物語』では、「未央の柳」が見せ消ちになっていることに不審を抱いて、親行に命じて質問させた。それは、光行は、整った対句になっているほうがよいと考えたからであった。

④ 親行は、「未央の柳」を見せ消ちとした理由を俊成に尋ねたところ、満足な答えが得られず、光行からも若菜の巻を読むように叱られた。そこで、自身で若菜の巻を読み、「未央の柳」を不要だと判断した。

⑤ 俊成は、光行・親行父子に対しては、「未央の柳」は見せ消ちでよいと言っておきながら、息子の定家には「未央の柳」をはっきり残すように指示していた。それは、奥義を自家の秘伝とするための偽装であった。

■ 2017年度 試行調査

問題番号	設　問	解答番号	正　解
第４問	1	1	1
	2	2	4
	3	3	1
	4	4	5
	5	5	3
	6	6	3

■現代語訳

【文章Ⅰ】

あの（桐壺の更衣の母からの）贈り物を（帝に）ご覧に入れる。（玄宗皇帝が道士に命じ、道士が）亡き人（＝楊貴妃）のすみかを探し出したとかいう、証拠のかんざしであったなら（どんなにうれしいだろう）、と（帝は）お思いになるが、まったくかいのないことだ。

尋ねゆく……＝（桐壺の更衣の魂を）尋ねて行く幻術士がいればなあ。人づてにでも魂のありかをそこと知ることができるように。

絵に描かれている楊貴妃の容貌は、すぐれた絵師といっても、筆の力に限りがあったので、たいそう美しさが少ない。太液という池に咲いている蓮の花と、未央という宮殿に植えられている柳も、本当に（それに）似通った（楊貴妃の）容貌を（思うと）、中国風の装いは端正であっただろうが、（桐壺の更衣は）心がひかれてかわいらしかったことを（帝は）思い出しなさると、花や鳥の色にも声にも、たとえようがない。

【文章Ⅱ】

あの（桐壺の更衣の母からの）贈り物を（帝に）ご覧に入れる。（玄宗皇帝が道士に命じ、道士が）亡き人（＝楊貴妃）のすみかを探し出したとかいう、証拠のかんざしであったなら（どんなにうれしいだろう）、と（帝は）お思いになるが、大変悲しい。

尋ねゆく……＝（桐壺の更衣の魂を）尋ねて行く幻術士がいればなあ。人づてにでも魂のありかをそこと知ることができるように。

絵に描かれている楊貴妃の容貌は、すぐれた絵師といっても、筆の力に限りがあったので、たいそう美しさが少ない。太液という池に咲いている蓮の花も、本当に（それに）似通った（楊貴妃の）容貌・顔色と、中国風にしていたような装いは端正で、美しかっただろうが、（桐壺の更衣の）心がひかれてかわいらしかった様子は、女郎花が風になびいているよりもしなやかで、撫子が露に濡れているのよりもかわいらしく、（帝は）心ひかれた容貌・様子を思い出しなさると、花や鳥の色にも声にも、たとえようがない。

【文章Ⅲ】

亡き父の光行が、昔、五条三品〔＝藤原俊成〕にこの物語〔＝『源氏物語』〕の不審の所々を尋ね申し上げました中に、当巻〔＝桐壺の巻〕に、「絵に描かれている楊貴妃の容貌は、すぐれた絵師といっても、筆の力に限りがあるので、美しさが少ない。太液の芙蓉、未央の柳も」と書いて、「未央の柳」という一句を見せ消ち〔＝文字が読めるように文字の上に線を引くこと〕にした。これによって（父光行は）親行〔＝筆者〕を使いにして、

「楊貴妃を芙蓉と柳とにたとえ、更衣〔＝桐壺の更衣〕を女郎花と撫子にたとえる。みな二句ずつでよく理解できますのを、（俊成卿の）御本で、未央の柳を消されたのは、どのような理由があるのでしょうか」

と申し上げたところ、（俊成卿が）

「私はどうして勝手なことをするだろうか、いや、勝手なことなどするわけがない。藤原行成卿の自筆の本で、この一句を見せ消ちになさった。（行成卿は）紫式部と同時代の人ですので、申し合わせるようなこともあるでしょう、といってこれも墨をつけて（消して）はいますが、不審に思い何度も見たところ、若菜の巻で（その理由を）理解して、おもしろくみなしているのです」

と申し上げなさったのを、私親行が、（父に）このことを語ると、（父が）

「若菜の巻には、どこに同類がありますと（俊成卿は）申し上げなさったのか」

と言うので、

「そこまでは尋ね申し上げない」

と答えましたのを、（父が）さまざまにはずかしめ叱りましたので、私親行は（家に）こもって、若菜の巻を数回開き見ると、（俊成卿が言った）その意を理解した。六条院の女試楽〔＝光源氏が邸宅で開催した女性たちによる演奏会〕で、女三の宮が、他の人より小柄でかわいらしげで、ただ御衣だけがあるような心地がする（のが）、美しさの点では劣っているが、とても気品がありかわいらしくて、二月の二十日ごろの青柳が枝をたらしはじめたような様子で、とある。柳を人の顔にたとえていることが多くなることによって、（かえって俊成卿は桐壺の巻の「未央の柳」を）見せ消ちになさいましたのだ。三品〔＝俊成卿〕の和才〔＝和歌や和文に関する才能〕がすぐれた中にこの物語〔＝『源氏物語』〕の奥義ま

でも極められましたのは、すばらしいことである。そうであるのに、（俊成の息子である）京極中納言入道〔＝藤原定家〕の家の本に「未央の柳」と書かれていることもあるのでしょうか。また俊成卿の女（むすめ）に（定家の「未央の柳」のことを）尋ね申し上げましたところ、（俊成卿の女は）「このことは代々の書写の誤りで書き入れられたのだろうか、あまりに対句のようにしてみにくい感じにした人がいるのでしょうか」と云々。よって私の本〔＝源光行・親行親子が整えた本文〕ではこれ〔＝未央の柳〕を用いない。